

次なる戦いに向かって進め その4

二回戦のために、岩手に向かう高速は14：00まで不通だった。とにかく来てほしいということから、いわき中央インターにバスを走らせたときに、ヘリコプターが飛ぶ空の下、その光景は広がっていた。

街が街ではなくなっていた。人がとぼとぼと歩きつつどうすることもできない現実に打ち負かされている光景が広がっていた。車が水の中にあった。様々なものが水の中に浮かんでいた。命からがら逃げのびていく人々もいた。

この現状から、自分たちが岩手に向かっていいのかという思いは誰にもあった。しかし、この地域の人々に今できることは、自分たちが勝つことだけだと思っておした。監督は言った。

「これを見ておけ。この現状からお前たちは闘いに出向くのだ。いわきを背負って戦うぞ」

眠れずに迎えた、次戦は、秋田の強豪だった。ずっと0-1で負けていたが、エンドランからランナーが出てタイムリーで逆転した。臆せず勝つことができた。

本来なら、あと二つ勝つべきだったが、もう一つ力が重ならなかったことは悔しいの一言である。しかし、まだまだ、チームのレベルは上げることができるとは全員が一つになっていたことは間違いないことだった。

帰宅すると、親戚や地域の実情が一つ一つ明らかになった。同級生も、恩師も被災していた。1階部分がすべて水没したので、2階で生活をしなければならない状況や、水が引いて悪臭が立ち込める1階を掃除する手立てもなく、水につかった3台の自家用車が無残にも泥まみれになっている状況があった。

誰からでもなく、ボランティアで地域に応援していただいた恩を返さなければならぬと、ゴム手にマスクや長靴を用意して、地域に向かった。それでも、その惨状はすさまじかった。

磐城高校の第二グラウンドも、2メートルの水がグラウンド一帯に入り、ラグビーやサッカーの休憩室は全滅。外トイレも流れて行ってどこかにある状況。

洗濯機やスタッドレスタイヤがゴロゴロあちらこちらの水辺に飛び散っており、何とかごみを一か所に集め市役所に連絡はしたものの、あちらこちらからごみを持ち込んでグラウンドに置いていく人もあり、山のようながれきに道もなくなってしまい困っていたところ、自衛隊に救援活動でいらしていただき、三日間で完璧に片付けていただきありがとうございました。

グラウンドでは、昔ながらのサッカーラグビー野球の練習を調整しながら行ってきた。そんな日々の、21世紀枠の話がどんどん加速していくのであった。